

保育思想へのアプローチに関する学生ニーズ¹⁾

—「保育原理」における思想項目の意義を巡って—

田 口 賢太郎・吉 田 直 哉*
(香川短期大学・*東京成徳大学)

0. はじめに——目的と課題

本研究の目的は、学生は「保育思想」に対して何を求めているかを明らかにすることにある。言うまでもないことであるが、ここでいう「保育思想」とは、保育士養成課程の必須科目である「保育原理」の内容とされている「保育の思想と歴史的変遷」における前者のことを指している²⁾。この「保育思想」については、保育者を目指す学生にとっては予め必須科目の内容として定められているのであるから、本研究においては、あえてこれを学ぶ必要があるのかどうかという問いの立て方はしない。学ばねばならないとされている事柄を学ぶことによって得られるものとして、学生はそこにどういったことを期待しているのかを問いとしたい³⁾。

ただし、報告に先立って断っておかねばならないが、本研究は、必ずしも「実際の授業内において『保育思想』を、より学生の求めるものに近づけて取り扱うべきである」、といった供給側から需要側へのすり寄せを結論として安易に前提するものではない。したがって、学生の「保育思想」に向けられたニーズが何であるかということを明らかにすることのみならず、このニーズに対してどう応えていくべきかという点も、われわれの検討すべき課題に含まれている。少なくとも、本研究においては、〈保育士養成課程の教員が暗に想定している、『保育思想』を学ぶことによって学生にもたらされるであ

う、「供給」知見〉と、〈当の学生が『保育思想』に対して寄せている「期待」知見〉とのあいだの落差は明示される。これにより、一般的に学生にとっては興味を持ちにくく、とっつきづらいつと考えられている「保育思想」項目について、授業でいかに取り扱うかという、その方法を検討するための有意な一材料が提示されるはずである。

1. 研究方法と調査概要

このような問題関心に基づき、また、養成校教員が念頭に置いているであろう「『保育思想』を学ぶ学生に期待する学習成果」や「『保育思想』項目の授業での取り扱い方法」といった教員側の授業運営上の視点を出発点とするのではなく、学生側が何を求めているのかという観点から発して、当該の「保育思想」へのアプローチを考察した先行研究は管見の限り見当たらない。その理由として考えられるのは、先に触れた一般的な授業者の感覚と言うべきものでもあるが、「学生は保育思想を退屈な項目だと感じている」などの先入見があるためかもしれない。もしそうであってみれば、「学生が保育思想に何を望むのか」、という問いの設定自体がそもそも間違っているものとも考えられるであろう。しかし、この〈学生の保育思想に対する印象・感慨〉は「事実」ではなく、単なるわれわれ教員の先入見に過ぎないのではないだろうか。このことは、「保育原理」(あるいは教育原理でも同じことであるが)において、「思想」の項目を授業で扱う際に学生の反応が良くない、ということがしばしば言われるにも関わらず、それをどのように捉えるべきかという研究が存在していないことにも伺われはしないだろ

平成27年1月6日受理
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学 子ども学科第I部 715研究室
TEL 0877(49)8059 FAX 0877(49)5252
Email Taguchi@kjc.ac.jp

表1 I アンケート調査結果

	ある	ない	無効	回答数
①保育思想を学ぶ意義はあると思うか	112	15	0	127
②保育思想を学んで役立つ機会があると考えられるか	90	33	4	123
	現代	過去	無効	回答数
③過去と現代の保育についての考えのうち、どちらに興味をもてるか	106	21	0	127

うか。したがって、何よりもまず、学生がどのように感じているかを探るところが始めるべきであろう。

さて、上記諸点を看過せぬように考慮しつつ、「保育思想」が学生の意識に占めている価値的な位置取りを明らかにするため、下記の通り、質問紙調査を行った。なお、質問項目を立てるにあたっては、われわれは以下の3点に関心を絞った。

- ①「保育思想を学ぶ意義」を学生自身がどのように考えるのか。
 - ②「保育思想の有用性」はどのようなものと受けとめられているのか。
 - ③「思想」の特性であり、またその有用性とも関連すると考えられる「過去の考えである」という点について学生はどのように考えているか。
- 以上の3点である。

なお、有用性ということに関しては、端的には「使える」という事であり、具体的には、知識として得られたものが、そのまま保育実践に転用可能であることを念頭に置いて用いている。

当該の調査においては学生に対し、

- ①「保育思想を学ぶ意義はあると思うか」
- ②「保育思想を学んで役立つ機会があると考えられるか」
- ③「過去と現代の保育についての考えのうち、どちらに興味をもてるか」

以上の3点が、それぞれ理由筆記もあわせて質問項目として示された。

本調査は、短期大学の保育士養成課程に在籍する1年生の学生が受講する「保育原理」の授業中に、実施された。回答数は127（ただし、細目で見れば、①127、②123（無効解答4）、③127）であった。アンケートに協力してくれた学生に対しては、研究に用いられること、またその成果は発表媒体を通じて

表2 II 問1と問2を合わせた場合の結果

	②ある	②ない
①ある	86…A	24…B
①ない	3…C	10…D

公表されることに関して予め了承を得ている。

2. 調査結果と分析

(1) 調査結果全体について

われわれが予め想定していたことに反して、①の質問に対しては「保育思想を学ぶ意義がある」と答えたものが大半となった（回答数112）。というのも、授業者の実感として、「思想」を扱う時の学生の興味関心具合は、子どもの発達状況等、実践的な知の伝授や、遊びなど、すぐさま使えるようなものを教えるときとは明らかに異なるため、意義がない、と判断する学生が多数ではないかと予想していたためである。

また、②の質問についても同様に「役に立つ機会がある」と答えたものが多く（回答数90）、共に「ある」と答えたものは7割近くにもなる（回答数86）。これについても、①よりは多少減るが、肯定的な意見が出てきた点において、予想を裏切られた形である。

一方、①「保育思想を学ぶ意義」も②「保育思想が役に立つ機会」もともに「ない」と答えたもの（回答数11）は、どちらかというと①か②の質問のどちらか一方のみに対して「ない」と答えたもの（①「ある」②「ない」の回答数=24、①「ない」②「ある」の回答数=3）の方に近い回答数となった。つまり、①にしる②にしる、設問に対して「ある」を選択した学生の大多数は、他方の設問に対しても「ある」と回答しているということである（表1）。こ

表3 ⅢⅡの結果にみる、問3（現代・過去）の内訳

	A (86)	B (24)	C (3)	D (10)	無効
現代に興味を持てる	69	21	2	10	4
過去に興味を持てる	17	3	1	0	0

の回答結果から単純に判断するのであれば、学生の大多数は「保育思想」を授業で取り扱われることにたいして意義を感じ、役立つ機会があると判断していることになるが、その内実の詳しい検討が必要になるだろう。よって、以下では引き続き、各質問に対する回答選択理由を確認していく中で、このような結果となった原因の分析およびそこから読み取れる「保育思想」に対する潜在的なニーズについて考察を加える。なお、調査結果はあくまで学生の持つ「保育思想」にたいする感覚を把握し、これを傍証、あるいは出発点として考察を重ねるためのものであって、調査結果をそのまま結論に直結させる何らかのエビデンスとして扱っているわけではなく、本研究にとっての一つのヒントとして捉えていることをお断りしておく。その意味では、本研究はあくまで「保育思想」研究の一部門に位置づけられるものと考えている。

(2) 回答と考察

まずは質問項目①に関して、思想を学ぶ「意義がある」という選択理由についてその一部を挙げると、

「過去と現代は時代背景が異なるので比較するには難しい場面もあると思うが子どもを保育する上で変わらず大切にすべき思想はあると思う。」

「過去の人たちが考えていた思想を勉強することによって、現代の保育との違いを学んだり、自分の考えと比較することが出来ると思うから。」

「過去の考えが今の考え方に繋がっていると思うから。」

などが挙げられる。

質問項目②に関して、思想が「役に立つ」、という理由については、

「モンテッソーリ教育を取り入れている所があ

ると聞いたことがあるので、働き出した時、「保育の思想」で学んだことが役に立つこともあると思う。」

「子どもや保護者の今の考え方と比較をする場面もあると思う。」

「保育士はどんどん変わらないといけないこともたくさんあると思うので、過去を知っておくいろいろな役に立つかなあとと思います。」

などが挙げられる。

思想を学ぶ「意義がある」、思想が「役に立つ」、というそれぞれの質問に対する理由として多く挙げられたものをまとめてみると、「現在の保育の基礎になっていると考えられるから」、「保育に関することで現場に出て役に立たない知識などない」など、学習意義に関しても、その有用性に関しても、ともに自身が保育士としてそこに立つことになるであろう「現場」を想定していることがうかがわれた。いざ自分が保育者となり子どもたちの前に立った時に有用であるようなものや、保護者とかかわりの際に必要なものであれば、思想は十分にその意義をもつということだろう。

このことは、質問項目③において、圧倒的多数が「過去の保育に対する考え方」よりも「現在の保育についての考え方」に興味がある、と回答していることとも関連すると認められるであろう（回答数＝「過去」21、「現代」106（表3））。というのも、この点からは、現代において流通している「思想」を把握しておくことで、「現在の保育」に自分をうまく摺りあわせていこうという態度が汲みとれるからである。

さらに、「現代の考え」を選択したもののうち、大半が研究者や専門家などの考えではなく、一般の人々の考え方の方に興味を持つと答えていた（回答数＝92/106）。その理由としては、

「これからの保育の場に立つ時、一番知っておかなければならないのは現代の一般の人、つまり保育園か幼稚園の利用者の考えを知ることが大切だと思うから。」

「自分は保育や子どもに興味があるが、保育に関係のない一般のひとの考え方は分からないから。」

「やはり今の保護者の状況や子育て社会の中での現在のことに対応していかなければならないので、現代の一般の人の考え方に興味があります。」

等を挙げることができ、「現在」を選んだ理由の多くには、近い将来、自身が保育士となることを想定し、保育現場での実践を念頭に置いていることが記されていた。つまり、研究者や専門家の提出するような「考え＝思想」は、自分が身を置くことになる現場とは隔絶しているとの判断が根底にあるのではないかと予想できる。

では、反対に、保育思想を学ぶ「意味がない」、保育思想を学んでも「役に立たない」、という回答としてはどのようなものがあっただろうか。その理由としては、

「昔の考え方のままだと今の子どもや親に対する対応もできないと思うし、もっと新しいものを学び今の子どもたちにもあったような遊びや、学習をしていかなければならない。」

「思想をどれだけ理解していても良い保育に直接つなげることはできないと思う。」

「過去の人たちの考えはこうだった、だから今このように保育していると考えながら保育はしないと思うから。」

といった回答が挙げられる。

理由の多くは、「現在と過去では時代が違うから」、「時代によって考え方は変わるので、過去のを現代において活かすことが出来ない」などがみられた。実際に、保育学生の悩みや心配事は、保育思想をどれだけ理解できているだろうか、という事よりも、「自分は子どもに対してちゃんと保育をこなしていくことができるのだろうか」、「保護者と関わる時にうまく子どもの状況を説明し、責任をも

てるだろうか」、「同じ園で働く先輩や同僚とうまくかわっていくことができるだろうか」といった点に向けられることが多い。このような不安は、いざ自分が保育者となって現場に立つことを考えたときに出てくるものである。ここで注目に値するのは、「意義がある」、「役に立つ」、との回答と同じく「現場」を想定しているがためにその否定的な選択が由来する点である。

全く同じ理由——現場で生きてくるか否かという関心をもつもの——であるにもかかわらず、異なる回答が導き出される理由として、単純には、関心事がポジティブに表出しているかネガティブに表出しているかの差である、ということもできる。しかし、そういった保育学生自身のメンタリティのみに回答の相違の原因を還元してしまうのではなく、「思想」というファクターに関して捉えなおしてみるならば、前者においては、過去と現在とに「接続」が見出されており、後者においては「断絶」が読み込まれている、と指摘することができる。すなわち、その差異はどこにあるのかと言えば、現代の保育の背景にある思想と過去の保育思想とがつながっているか否かである。

さらに言えば、この「接続／断絶」のフェーズは、学生の意識における現在の「保育実践」との「接続／断絶」を表してもいるのではないだろうか。つまり、今ここで自分が思想を学ぶということが、保育者となって以後の自らの保育実践とつながるかどうかである。恐らくこのことは、学生が保育思想を学ぶ際のモチベーションに決定的な影響をもたらすと考えられるだろう。

3. おわりに——本研究の示唆する保育思想への学生ニーズ

上記の結果をかんがみれば、保育思想を授業で扱う、ということにまつわる問題——学生がつまらないと感じている、教員が教えにくいと感じている等——は、保育思想が役に立つか否かではなく、その保育思想が自らとつながっていると認識しているか否かにある、と言えそうである。われわれの予見通り、学生は「保育思想」を学ぶことに関して、その意義を、実践的なレリバンス（妥当性）や有用性に

結び付けることを求めている。簡単に言ってしまうと、これから、自分が保育者となるにあたって、得られる知識が、保育という実践の場において使えるか使えないか、というものである。この点に関しては、教員側も、この学生のニーズをある程度は考慮してしかるべきであるだろう。

ただし、早合点してしまっただけではないのは、学生は「保育思想」を「使えない」からという理由で興味を持っていないわけではない、という点である。実際のところ、本調査の結果から判断すれば、学生の大多数は「思想」を役に立たないものだと思っただけで決めているわけではない。そうであるならば、実際の授業における取扱いとしては、「思想」を「使えるモノ」として再生させようとするような努力よりもむしろ、過去のものである「思想」が、「現在」に——ひいては、こんにちの保育実践に対して——どのようなつながりを持ちうるかということを学生に提示する方が、埋もれてしまった「保育思想」の「有用性」をもう一度喚起し、学生に興味をもたらし、と言いうるだろう。

近年、保育士養成に関して言えば、その養成課程の科目数の増加にもみられるように、ますます保育に関する知識や技術が求められる傾向にある。この流れの中であって、厚生労働省、養成校ないしは園において念頭に置かれているのは、おそらく「即効性」や「実用性」であろう。そのような「即効性」や「実用性」にのみに、保育士の「専門性」が限局されて論じられる現状があるのではないかと、われわれは危惧するところである。しかし、そのような実践への有効性を最重要視する立場をとったからといって、思想の扱いについても、「有用」な（＝使える）「道具」へと姿を変えていかなければならない、という方向性を、必ずしもとらねばならないというわけではないだろう。というのも、そのような、「有用性」に保育思想の存在意義を依拠させる立場をとったとすれば、たとえば、モンテッソーリの思想や教具についての知識は、モンテッソーリ教育を行っている園に就職するつもりがない保育学生にとっては、意義のない、無用の知だということになってしまう。このことは、フレーベルや、中世の子育て思想など、時代を遡れば遡るほど顕著になっていく。そうになると、必要な「思想」として選択さ

れるものは自ずと、現代に近い思想、（それも思想家や研究者のものではなく）一般的な感覚に近いものになっていき、結局のところ、「保育原理」において「思想」を取り扱う意義自体が根底からゆるがせにされてしまうだろう。これに対して、本研究において明らかにされた事実、及びそれに基づく方向性は、「思想」を、すぐさま使える「道具」にするという方向とは違う道を行きながら、なおかつ学生にとっての満足、すなわち「有用性」志向へのニーズへの応答性を高めることになる、という点において優れたものであると考えられる。

注

- 1) 本研究は、2014年日本保育学会大会において田口賢太郎（香川短期大学）、吉田直哉（東京成徳大学）、竹山貴子（お茶の水女子大学大学院研究生）「保育思想へのアプローチに関する学生ニーズの類型化」という表題で口頭発表したものに、田口と吉田が共同して加筆修正を加えたものである。本稿に限っては、著者として竹山氏の名前を連ねてはいないが、前出の研究発表に際して、同氏から多大な示唆および協力を頂いたことをここに記し、謝辞に替えたい。
- 2) 付言しておくなら、「保育原理」と同様に、保育士資格の必修科目である「教育原理」においても、思想・歴史の項目は存在する。「教育原理」は教育職員免許法及び同法施行規則に定める科目としての「教育の基礎理論に関する科目」のうち「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想・教育に関する社会的、制度的または経営的事項」に該当するものとして扱われている。なお、保育士資格取得の必修である科目「保育原理」は、幼稚園免許取得に関して、必修ではない。このことに関する幼保の差異から生まれる課題に関しては、「教職課程における「教育原理」の教育的位置価値に関する研究——教員養成と保育士養成の必修科目のあいだで「原理」を問う——」（『教員養成の現代的課題』発達教育学研究会／公立大学法人岩手県立大学共通教育センター教職部門、岩手県立大学学部等研究費「大学における望ましい教員養成カリキュラムの在り方に関する研究」報告

書)において触れている。

3) 本研究に先立って、保育士資格必修科目「保育原理」における、「保育思想」の取り扱われ方の類型化を試み、(1) 現在の保育原理と隔絶した「過去の事実」、(2) 現在においても有効性を有すると見なす「現在に生きる原理」、(3) 過去の思想家の言説を現在の保育原理の「思想的源流」という3つにまとめ、教育実践のための下敷きとなる理論研究に既になっている。本研究は、実践レベルで学生とのやり取りを見据えた時に問題となる、学生の思想への関心に照準している。(田口賢太郎・吉田直哉「保育原理における思想家へのアプローチ—歴史認識の類型化の試みと授業実践への提案—」『香川短期大学紀要』42号, 2014年, 79～84頁。)

参考文献

- 田口賢太郎・吉田直哉「保育原理における思想家へのアプローチ—歴史認識の類型化の試みと授業実践への提案—」『香川短期大学紀要』42号, 2014年, 79～84頁。
- 吉田直哉「保育原理を学ぶ意義」吉田直哉編『保育原理の新基準』三恵社, 2014年, 3～13頁。